

Title	日露戦争とトルコ：日露戦争史の一断面
Sub Title	Turkey and the Russo-Japanese War: An aspect of the international conflict
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.3 (2004. 3) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040328-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日露戦争とトルコ

——日露戦争史の一断面——

池 井 優

はしがき

第一章 日露戦争にいたる日本トルコ関係

第二章 日露戦争勃発とトルコ

1 トルコの出兵

2 黒海艦隊の二海峡通過問題

第三章 山田寅次郎の動き

第四章 トルコに与えた日露戦争の影響

むすび

はしがき

本稿は日露戦争の勃発、戦争の経過、日本の勝利にトルコがどのように関連したか分析するものである。一九〇四年二月日本海軍の仁川沖・旅順のロシア艦隊への奇襲で開始された日露戦争は、翌年三月日本の奉天

占領、五月の日本海海戦、そしてアメリカのローズヴェルト大統領の斡旋により九月ポーツマスで開催された会議において講和が成立するまで、日本にとってまさに国運を賭けた戦いであった。日英同盟という後ろ盾があったものの、日本は軍事的にも外交的にも細心の注意を払ってこの戦争に臨んだ。そうした中で注目されたのがトルコの存在であった。ロシアと国境を接し、度重なる露土戦争で不倶戴天の敵であったのみならず、ロシアの有する黒海艦隊の通過が考えられるダーダネルス、ボスポラス両海峡を自国領土内に持ち、またロシア情報を得る対象としても重要であり、日本は日露戦争の遂行にあたっていろいろな方面でトルコを活用しようとした。

本稿は(一)日露戦争にいたる日本トルコ関係を概観し、日露戦争の時点で両国には国交がなかったにもかかわらず、トルコが極めて親日的な対応をした背景を探り、(二)日露戦争の勃発とトルコの反応、トルコの出方、さらに日本海軍の軍事作戦の大きな影響をもつロシア黒海艦隊のダーダネルス、ボスポラス両海峡の通過をトルコが許可するか否かを明らかにし、(三)イスタンブールにあつて多彩な人脈を駆使して情報の収集、トルコ人への働きかけをおこなった山田寅次郎の動きを追ひ、(四)日露戦争の勝利がトルコにどのような影響を与えたかを述べ、結論に導きたい。

第一章 日露戦争にいたる日本トルコ関係

日露戦争の時点で日本とトルコの間には国交がなかった。しかし両国はかなり以前から交流を重ねてきた。明治維新を達成した日本は、一八七一年一〇月岩倉具視を全権大使とする使節団がアメリカとヨーロッパ諸国歴訪に出発するが、同じ年、岩倉は外務省の福地源一郎にトルコ視察を命じた。福地はイスタンブールに滞在し、トルコ帝国の状況に関する報告書をまとめ、寺島宗則外務卿をへて三条実美太政大臣に提出された。寺島は三条に

トルコと外交関係を結ぶべきであると提案し、駐英上野景範公使にイギリスとも相談するよう連絡したが、いろいろ事情があり、実行に移されることはなかった。また日本軍艦清輝が海軍士官候補生をのせてイスタンブールを訪問したり、一八八一年吉田正春外務省理事官一行がトルコを訪れ、アブデュル・ハミト二世に謁見したことも二国の間をさらに近づけた。

明治天皇とトルコ皇帝はロシアの脅威という共通するものもあって、互いに親近感を持っていたが、最初に積極的な動きをみせたのは明治天皇であった。一八八七年小松宮彰仁、同妃殿下が西ヨーロッパ歴訪の帰途トルコを訪問、皇帝に菊花大綬章と明治天皇からの個人的贈り物がプレゼントされた。トルコ皇帝は日本への答礼使節団の派遣を考え、一八九〇年オスマン・ベイ海軍少将を最高責任者とするエルトゥールル号が日本を訪れた。使節一行は日本で大歓迎を受け帰途について、ここで事件が起る。九月一六日紀州沖にさしかかったエルトゥールル号は台風に遭遇、座礁した船体は真つ二つに割れ、六五〇名の乗組員のうち生存者わずか六九名という大惨事となった。地元の人々の懸命の救助活動、犠牲になった乗組員の慰霊碑のための募金、殉難者とその遺族に対する義捐金の徴募、さらに負傷者の回復を待つて六九名の生存者を二隻の巡洋艦に分乗させてトルコまで送り届けたことは、皇帝以下トルコ国民の親日感情を決定的にした。皇帝は、感謝の意を表するため侍従武官メフト・ムラト・ベイ少佐を日本に派遣、明治天皇に謁見してメッセージを伝えさせたほどであった。⁽²⁾

以後オスマン帝国と日本の間に正式な外交関係を樹立しようとする努力がつけられた。一八九三年五月榎本武揚外相の要請によりイスタンブールを訪れた青木周藏駐ドイツ公使は皇帝はじめ政府要人と会谈、ドイツに戻った青木公使とベルリン駐在のトルコ大使との間で具体的交渉がおこなわれた。しかし治外法権の撤廃、最恵国条項の承認に関して両国は合意に達することなく、日露戦争の勃発を迎えることになる。⁽³⁾

第 II 章 日露戦争の勃発とトルコ

1 トルコの出方

「日本がロシアに宣戦を布告した」、この報道にトルコ中が沸いた。トルコにとってロシアは怨念の的、宿敵だったからである。国境を接し、ロシアの南下政策にトルコは絶えず悩まされてきた。露土間の争いも当事国のみずれか一方による宣戦布告、またはそれに代わるなんらかの意思表示、もしくはは具体的行動によって開始されたいわば正式な戦争だけでも一回を数えることができ、特に一八七七年から七八年にかけて戦われた露土戦争に敗れたトルコはサン・ステファアノ条約によってバルカンの領土の大部分を奪われ、かつて強大を誇ったオスマン帝国の凋落にとどめを刺された観があった。ロシア勢力のバルカンへの影響力があまりにも大きくなることを恐れた列国は、一八七八年七月ベルリン会議を開催し、サン・ステファアノ条約を全面的に改訂してロシアの特権は制限したものの、トルコはかつての栄光を取り戻すことはなかった。

こうしたトルコにとって、極東の新興国日本がロシアに戦いを挑んだのは歓迎すべきことであり、国を挙げて陰に陽に日本に便宜を図ろうとしたのは当然であった。正式な外交関係がなかったためトルコに日本外交官は駐在していなかった。したがってトルコが日露戦争に対してどのような態度をとるのか、小村外相はイギリス、フランス、オーストリーなどヨーロッパ駐在の在外公館に命じてその出方を探ろうとした。ウィーンの牧野伸顕公使は部下の西書記官に在オーストリートルコ大使館の一等書記官に接触させ、トルコの動向を見極めようと試みた。アシンベイ書記官と面会した結果を牧野公使はつぎのように打電してきた。

「日露開戦以前ヨリ土耳其政府ハ素ヨリ上一般ノ社会ニ至ルマデ日本帝国ヘ同情ヲ表セシコトハ蓋フ可カラザル事実ニシテ、此ニ反シ土耳其人ガ露国ヲ嫌忌スルノ情ハ世人ノ熟知スル処ニシテ土耳其ト唱フル文字其者ガ既ニ露国ヲ忌ム

ト云フガ如ク意味セラル迄ニ同国人間ニハ露ニ対シテ悪感情ヲ抱ケリ、特ニ今回日露開戦トナリタルヤ土耳其ノ日本ニ対スル感情ヲ増進シ二月八日日本海軍ノ勝報土都ニ来ルヤ上下一般ニ日本ニ同情ヲ表スルト同時ニ東洋多事ノ間ハ露國ハ其勢力ヲ極東ニ吸収セラレ、他ヲ顧ルニ遑アラザルモノト想像シタリ、而レドモ土露兩國間ノ關係ヨリ熟慮セバ此際公ニ東洋ニ於ケル露ノ行動ニ付キ云々スルハ取りモ直サズ露ノ感情ヲ損スルニヨリ、策ノ得タルモノニ非ザルコトヲ感じ公會ノ場合ハ東洋ノ事變ニ関スル談話サヘモ避ケテ為サザルコトトナシ、例ヘハ土耳其外交官ガ当地交際社会ニ於テ露外交官ト会合セシ場合ノ如キハ務メテ慎重ノ態度ヲ示シ居ルコトトナシ居レリ……」

要するに、トルコは日本に同情し声援を送りたいのだが、現在のロシアとトルコの力関係からこれを公にすることはばかるといふものであった。そのひとつの例として、牧野公使は二月二〇日付けの Correspondance Politique の記事をあげる。日露間の戦争はとくにトルコ外交に影響することはないとの結論は表面的のもので、文字の裏面に真意があるといふのである。⁽⁵⁾ イスタンブールの各新聞はトルコ政府のきびしい検閲の下、戦況を詳報することを避け、欧州各紙の報道を転載するという苦肉の策をとった。⁽⁶⁾

2 黒海艦隊の二海峡通過問題

日本と戦争するにあたって、ロシアが海軍力をどう活用するかが注目された。ロシアが対日戦に参加させる艦隊はウラジオストクに根拠地を持つ太平洋艦隊、一八世紀の初頭ピョートル一世によって創設されバルト海を中心に活動するバルチック艦隊が考えられ、さらに黒海艦隊がこれに加わるか否か、もし加われば日本海軍にとって作戦上重大な意味を持つことになる。黒海における海上貿易の活発化に伴い一七八三年に創設された黒海艦隊は、一八三〇年代に同海域の制海権をにぎり次第に整備されていた。

日本にとつて軍事的にみてトルコがらみの最大の関心事は、黒海艦隊がトルコ領のダーダネルス、ボスポラス

両海峡を通過して地中海でバルチック艦隊に合流し、日本に向かうことであった。もしトルコ政府がロシアの圧力に屈し、黒海艦隊の通過を許可するならば日本は大きな影響を受ける。そもそもダーダネルス・ボスポラス両海峡はコンスタンチノープル海峡とも呼ばれ、地中海と黒海を連ねる国際化された海峡である。この海峡は一四五三年にトルコが黒海をその内海として以来、絶えず国際問題となり、この海峡の通航制度も何度か変化した。⁽⁷⁾

一八四一年のロンドン協約では外国軍艦のダーダネルス・ボスポラス海峡の侵入禁止

一八五六年のパリ条約で黒海を中立とし、同海上港湾の諸国の商船に対して自由に開放する、ただし軍艦は通航禁止とする

一八七一年のロンドン条約で黒海の中立についてパリ条約の規定を廃棄、海峡閉鎖については厳守、トルコ皇帝は平和時においては海峡を友好国、同盟国に開放する

一八七八年のサン・ステファノ条約で両海峡は戦時・平時を問わずロシアの港湾に出入する中立国の商船に対して開放される⁽⁸⁾

日本の出先機関は全力をあげて①トルコは黒海艦隊の海峡通過を認めるのか、②黒海艦隊の能力はどの程度なのか、情報を入手しようとした。パリからロシア政府がトルコ政府に対し艦隊のダーダネルス海峡通過に同意を求め交渉中との報道がもたらされる。小村外相はその真偽をランスダウン外相に会って確かめるよう在英林権助公使に電報を打った。林は直ちにイギリス政府に確認するが、その事実はないとの回答を得る。⁽⁹⁾ またオデッサの飯島領事はトルコ政府の海軍教育に長年携わっていたイギリス人士官と長時間会談し、ロシア政府は艦隊の海峡通過を要求したであろうが、トルコ政府は承諾しなかったであろう、またロシアはイギリスとイタリアの反対をおそれこうした要求は今後はしないであろう、もし強行すればフランス、ドイツ、オーストリーは傍観するであろうが、武装不備のイタリアはともかくイギリスが正面に立つであろう。黒海艦隊は艦齢一一年、古いものは

一四年、なかには二二年といった老朽艦が多く、新造艦も遠洋航海に向かずさしたる脅威にはならない、との貴重な情報を得た。⁽¹⁰⁾ 牧野自身黒海方面で地理的に直接利害関係を持ち、オーストリーとは同盟国同様の間柄にあるルーマニアの公使にこの件についてなにか聞いていないかと質した。特に耳にしたことはないが国際条約が存在する限り海峡通過は全くないとの意見であった。ルーマニア公使はオーストリーの外務次官に面会して質問したところ次官も強く否定し、理由として海峡通過はトルコ、さらにイギリスの地中海に対する関心から両国は必ず抗議するので黒海艦隊の通過は不可能と断言した。ルーマニア公使は次官の見解をわざわざ日本公使館に來館して伝えてくれた。オーストリー政府の見解だと判断した牧野は本国に打電するとともに、イギリス大使に連絡し、大使は早速ロンドンに報告した。⁽¹¹⁾

黒海艦隊が動かないとしても、もうひとつの懸念があった。義勇艦隊の動きである。義勇艦隊とは露土戦争後ロシア人が自国海軍の奮起を促す目的で組織したもので、黒海にあつて目下一五隻の艦船を有する。艦船は二種類あり六隻はかなりの速力があり多少の戦闘能力を持つ予備巡洋艦で、他は単純な商船である。だが乗組員は予備海軍士官であったり、とくに日露戦争開始後は海軍水兵を乗船させた。条約の目を逃れるため商船として海峡を通過し、通過後軍艦旗を掲げ、大砲を公にすることも考えられた。⁽¹²⁾ 結局トルコ政府は七隻のロシア船の通過をイギリス代理大使と相談のうえ、以下の条件でみとめた。

- (1) 一日一隻ずつ通過のこと
 - (2) 武器兵員を搭載しないこと
 - (3) 海峡通過後においても軍艦旗を掲げないこと
 - (4) トルコ官吏を派遣し武器搭載の有無を点検すること
- こうして義勇艦隊の一部は両海峡を通過したが、黒海艦隊の通過はトルコ皇帝が最後まで許可せず、日本は胸

をなでおろしたのであった。

第三章 山田寅次郎の動き

トルコの首都イスタンブールにあって情報の収集にあたり、皇帝から庶民までトルコ人に広く接触して活躍した一人の日本人がいた。山田寅次郎である。⁽¹³⁾ 茶の湯宗徧流家元の血筋をひく山田は早くから陸羯南、福本日南、朝比奈知泉などと親交を結び、文壇の大御所との交流もあつた。エルトゥールル号事件を知ると、山田は各界の知己に働きかけて遺族への義捐金総額約五〇〇〇円（現在の価格で約一億円）を集め、青木周蔵外相にトルコへの送金を依頼すべく外務省を訪れた。山田の義拳に感動した外相は山田自身が義捐金を持参してトルコにいくべきだとすすめた。こうして一八九二年弱冠二六歳の山田は未知の国トルコに足を踏み入れる。山田が生涯をつうじて結びつくトルコとの出会いはこうして始まった。イスタンブールで山田は外務大臣サイド・パシャと会談、海軍省内に設けられていた「エルトゥールル号遭難救護会」宛てに義捐金を送ることになり、第一の目的を達した。数日後アブデュル・ハミト二世に拝謁を許され、山田家に伝わる明珍の兜と甲冑、陣太鼓を献上した。やがて外相を通じてしばらく当地にとどまって陸海軍の士官に日本語を教授することを皇帝が希望している旨伝えられ、山田はしばらくイスタンブールで生活することを決意する。

約四年トルコに滞在した山田はトルコ語も上達し現地の風俗習慣にもすっかりなれた。日本語の授業も一段落したところで山田は一時帰国をきめた。日本に戻る山田にアブデュル・ハミト二世から日本の珍しい品々を持ち帰るよう要請がなされた。一八九六年二月帰国した山田は榎本外相に会見を求め、トルコでの体験を語り、今後の日土貿易の必要性を説いた。外相は早速実業家を集めた講演会、懇談会の手配をしてくれ、山田は東京のみな

らず大阪にも赴いてトルコ事情や日土関係の将来について講演したり、関西の財界人にトルコとの通商・貿易の可能性を語ったのであった。いったんトルコに戻った山田は皇帝に珍品を献上すると同時に日本の雑貨類をイスタンブル商品陳列館に展示し注目をあつめた。

展示の好評もあつて山田は皇帝のすすめでイスタンブルにしばらく滞在することを決め、中村商店で働くことにした。中村商店とは一八九三年からトルコに住む元海軍大尉の中村健次郎が営む日本雑貨を売る店で、絹や薬用アヘンを日本に輸出し、街の目抜き通りにあつて繁盛したという。こうして山田はトルコにおける民間大使の役割を果たすようになった。⁽¹⁴⁾

日露戦争が勃発すると、山田のもとにオーストリーの牧野公使から黒海艦隊の動向を監視せよとの命令がきた。山田はボスポラス海峡を見下ろせる岬の丘陵地に一軒家を借り、望遠鏡で北の水平線を望み、黒海艦隊の南下を監視した。さらに山田は二〇人ものトルコ人を雇い、海峡に臨むガラタ塔からの監視を四六時中つづけさせた。

ある日三隻のロシア船が武装を解いて石炭を積み込み、食料や飲料水を補給して出航の準備をしているのを目撃した山田は、ただちに牧野に通報する。牧野は日本に緊急電を送る。「コンスタンチノープルからの密報によれば、ロシア義勇艦隊のペテルスブルグ、スモレンスク、オリョール三隻が七月四日ダーダネルス海峡を通過し南下せり⁽¹⁵⁾」。その三隻のうちペテルスブルグと、スモレンスクは七月八日および九日にいずれも商船旗を掲げてスエズ運河に入り、一〇日ウラジオに向かつて出向したとの確報があった。この偽装したロシア軍艦はエーゲ海に出た後、ギリシャで武装してアフリカ東部の沖合いでバルチック艦隊に合流している。⁽¹⁶⁾

また山田は皇帝の希望で宮殿に三回召され、日露戦争の戦況についての下問に答えたのであった。⁽¹⁷⁾ 山田の果たした役割の大きさは、戦後小村外相がその功労を賞して銀七宝花瓶一組を感謝状とともに贈呈したことによつても証明されよう。

第四章 トルコに与えた日露戦争の影響

日露戦争の推移に多大の関心をよせた皇帝アブデュル・ハミト二世は、戦場に観戦武官の派遣を希望し、当時オスマン陸軍の近代化を図るため配属されていたドイツのフォン・デル・ゴルトツ將軍も皇帝への書簡で同じ考えを述べ、日本に申請した。日本は他の一三カ国とともにトルコにも許可を与え、⁽¹⁸⁾ペルテヴ・パシヤ大佐は一九〇四年八月一日イスタンブールを出発、九月二五日横浜に到着、日本外務省と連絡をとり、駐日ドイツ公使館とも打ち合わせをおこなった。そして一〇月三日日本から満州に向かい、現地の日本軍に従軍することになった。同大佐は日本で多くの要人とあっているが、そのなかには後にトルコ革命を支援することになる西本願寺宗主大谷光瑞も含まれていた。従軍中は本国に戦況について逐次報告を送り、帰国後従軍の感想を戦記『日露戦争』として公にし、イスタンブールにおいて講演、その速記録を『日露戦争の物質的精神的教訓並びに日本勝利の原因』と題して印刷しB 6判一二〇ページのトルコ文単行本として出版した。ペルテヴ大佐は、著書のなかで一国民の運命は自己の実力によって決まることを力説し、旅順攻撃軍の勇敢さ、兵士の犠牲的精神、優れた歩兵操典を賞揚している。ただ騎兵だけはロシアのコサック兵に劣るとしているが、総じて日本軍を賞賛し、これを見るとトルコの将来も決して悲観すべきでない⁽¹⁹⁾と結論している。

日本のロシアとの戦いをリアルに伝えたのが、ようやく実用的になった映画であった。活動写真とよばれた映画は映像も不鮮明であり同時録音の技術もなかったが、言葉のいらぬ伝達の手段として実況が印象づけられ回教諸国の民衆への効果は大きかった。⁽²⁰⁾山田寅次郎の回想によれば、トルコ国民は赤十字、新聞社などを通じて義捐金を寄託したり、戦争による日本人の負傷者を慰問するものが相次いだ⁽²¹⁾という。こうした状況の下、シベリア

のトムスク生まれのトルコ人アデュドルレシッド・イブラヒムは皇帝の命により極東に渡り、シベリア、中国、満州をへて日本に渡りイスラム教の布教活動を開始したのであった。⁽²²⁾ この活動は必ずしも期待したほどの成果は挙げられなかったが、トルコ一流新聞の記者であり、早くからローマ字採用論を主張するなど先見の明があったアブドラ・ジェヴデット・ペイは奉天の会戦と日本海海戦の直後、雑誌に「ロシアと日本」を寄稿しこう述べた。「日本がもしイスラム国となれば、日本の天皇陛下がカリフとなることが最も適当である。これを以てイスラム諸国の団結は、いよいよ強大なものとなるであろう」。

日露戦争における日本の勝利にトルコがどれほど喜んだか、皇帝アブデュル・ハミト二世は「日本の成功でわが国は意欲を取り戻した。ロシアに対する日本の勝利はわが国の勝利と考えるべきである。ロシアの余力が極東に注がれるのはわれわれにとって幸福である。なんとなれば黒海方面におけるロシアの攻撃力はこのため減少するからだ。形勢が幾分でも立ち直りさえすれば、ロシアが直ちに再びわれわれに対する行動を開始するのは明らかである……」⁽²⁴⁾と述べ、著名な詩人でトルコ国歌の作詞者であるメフメト・アーキフは「ミカドナーメ」を發表し称賛をこめて日本の勝利を描写した。日本に関する本がつきつきに出版され、新聞、雑誌にも日本の記事が多く載せられた。有名な作家であり思想家でもあったハリデ・エディップ・アドゥヴァル夫人は生まれた息子に日本海海戦の英雄東郷の名をとって「ハサン・トーゴ」と命名したほどだった。⁽²⁵⁾庶民のなかにも子供の名前や屋号を「ノギ」、「トーゴ」とするものが多かったという。

日露戦争の日本の勝利の影響は、トルコ帝国内のすべての政治運動にまで及んだ。青年トルコ党運動は明治維新をモデルとし、トルコを近東の日本とみなした。汎トルコ哲学者で指導者でもあったジャ・ギユカルプはトルコの進歩は日本と同様にトルコ文化の維持と近代化の二つに基づくべきだと提案した。

「今日、日本はヨーロッパの一国として受け入れられ、わが国はアジアの国として受け入れられている。この処

遇の理由はわが国がヨーロッパ文明に十分適応できないことにある。日本はヨーロッパ文明を採用しながら、一方では自国の宗教と国民性を維持している。そうすることによってのみ、すべての点でヨーロッパに追い付くことができる。日本の宗教や文化は少しでもたがが緩んだであろうか。決してそういう事態にはならなかった。ではなぜわが国は躊躇するのか、なぜわが国は徹底してトルコの、またイスラムの資質を失うことなくヨーロッパ文明を採用しないのか。⁽²⁶⁾この主張は一九〇八年の「青年トルコ党」革命へとつながった。トルコ近代化の父でありトルコ共和国初代大統領ケマル・アタチュルクが日本に対し十分な理解をもっていたことは周知の事実である。

むすび

日露戦争を通じて、日本とトルコとはさまざまな面で親密な関係をつづけた。問題は両国の間に国交がないことであった。前述したように、一八九三年ドイツ駐在の青木公使がイスタンブールを訪れ外交関係を樹立しようとの話し合いがもたれ、ベルリンで青木とトルコ大使との間で交渉が開始されたが進展しなかった。日露戦争の直前、ウイーンを舞台に交渉が再開された。牧野公使はオーストリー駐在のトルコ大使に面会し日本政府が両国間に条約の締結をみることを希望し、五年前に覚書を手交したまま今日にいたっているのは遺憾であり引き続き交渉したいと申し出た。大使は、トルコにおいてはすでに条約は成立したのも同然と考えられた時代もあり、自分の同僚は駐日公使に擬せられ日本への長旅の準備まで始めたことすらあったと語り、意欲をみせた。しかし本国の意向を聞くといった大使からの返事はなかなか来なかった。問題は日本の手渡した草案に治外法権の一項が含まれていたことであった。日露戦争開始後、牧野はウイーンでは参考になる情報は得がたいと考え、イスタン

ブルに働きかけた。皇帝の側近にイゼット・パシャという有力者がおり、山田寅次郎をしてその人物に接触させ、日土条約に対する皇帝の意向を知ろうと努めた。その結果皇帝が条約締結を躊躇する理由は、①ロシアに対する配慮、②戦時中の日本がトルコに対しきりに国交を求めるのは露土両国間の関係からして日本が特にトルコを利用しようとすることへの懸念、③治外法権放棄が条約文中に明記されない限り、条約の締結は将来に禍根を残す、と判断された⁽²⁷⁾。

牧野は疑念を解くには、日本政府の代表がイスタンブルを訪れ、皇帝と側近に誠意を披露する、トルコ駐在で日本に理解のある外国大使の援助を求めるといった手段があることを示唆したが、いずれも実現しなかった。日露戦争終了直後の一九〇六年六月徳富蘆花がトルコを訪れ、トルコ人の親日的態度を『順礼紀行』のなかで紹介したり⁽²⁸⁾、日露戦争の英雄乃木希典大將がイギリス訪問の帰途イスタンブルに立ち寄り、皇帝メフメット二世と皇太子に拝謁、大歓迎を受けたが、いずれも外交関係の成立に結びつかなかった。それどころか、第一次大戦ではトルコがドイツ、オーストリーの同盟国側にたち、日本はイギリス、フランスなどの連合国側の一員として参戦したため直接戦闘を交えることはなかったが、敵対関係となり、一九二〇年のセーブル条約によりトルコは西欧列強による分割解体の危機にさえ直面した。この危機に際しアンカラを拠点に「国民闘争」を指導したのがムスタファ・ケマル・パシャ（のちのケマル・アタチュルク）であった。彼の創設した大国民議会は二年一月スルタン制を廃止し、二三年八月セーブル条約を修正したローザンヌ条約を締結、このときようやくトルコは日本と正式な外交関係を結んだのであった⁽²⁹⁾。第二次大戦時には、トルコは戦後の国際連合への加盟資格をうるため一九四五年一月二三日になって対日宣戦布告、再び敵対関係にはいった。しかし両国とも大使館は閉鎖せず、いうまでもなく直接の軍事的対決はなかった。

今日両国がたがいに相手国に親密な感情をいだいているのも、歴史的背景によるところが多い。

- (1) 日露戦争を対象とした研究には、信夫清三郎・中山治一編『日露戦争史の研究』(一九五九年、河出書房新社)、古屋哲夫『日露戦争』(一九六六年、中公新書)、谷寿夫『機密日露戦史』(一九六六年、原書房)、大江志乃夫『日露戦争の軍事的的研究』(一九七六年、岩波書店)などのほか多くの論文があるが、トルコがらみの研究はすくない。
- (2) エルトゥールル号事件については、外務省、防衛庁の史料を参照した波多野勝「エルトゥールル号事件をめぐる日土関係」(池井優・坂本勉編著『近代日本とトルコ世界』一九九九年、勁草書房)、トルコ海軍省の史料を利用した小松香織「アブデュル・ハミト二世と一九世紀末のオスマン帝国―「エルトゥールル号事件」を中心に」(『史学雑誌』九八巻九号、一九八九年)が詳しい。
- (3) 日本とトルコの歴史的関係は、内藤智秀『日土交渉史』(一九三二年、泉書院)、ウムット・アルク、村松増美、松谷浩尚訳『トルコと日本―特別なパートナーシップの二〇〇年』(一九八九年、サイマル出版会)、松谷浩尚『日本とトルコ―日本トルコ関係史』(一九六六年、中東調査会)、松谷浩尚『日本トルコ交渉史―解説と資料』(一九九九年、岡崎研究所)。なお通史ではないが、慶應義塾大学地域研究センターの共同プロジェクト「日本とトルコ関係の歴史的考察」の成果が註(1)で紹介した池井、坂本共編著となり関連論文七編が収録されている。また Selçuk Esenbel and Inaba Chiharu, *The Rising Sun and the Turkish Crescent—New Perspectives on the History of Japanese-Turkish Relations*, 2003, Bogazici University Press も池井、坂本共編書の論文五本の英訳のほかトルコ人研究者による論文六本、日本人研究者の論文二本、計十三本の論文が収録されている。
- (4) 露土戦争はじめトルコとロシアの歴史的関係については、高橋昭一『トルコ・ロシア外交史』(一九八八年、シルクロード)
- (5) 在オーストリー牧野公使より小村外相宛電報一九〇四年三月三日(『日本外交文書』日露戦争II)
- (6) 高橋前掲書二四四頁
- (7) 国際法学会編『国際法辞典』(一九七〇年、鹿島出版会) 四一一頁、国際法学会編『国際関係法辞典』(一九九五年、三省堂) 五三二頁、両海峡についての浩瀚な研究は芦田均『君府海峡通航制度史論』(一九三〇年、巖松堂)、芦田は一九二五年から三〇年にかけてイスタンブールで外交官生活を送り、この間にダーダネルス・ボスポラス両海峡

- に関する研究をまとめ、博士論文としてまとめ母校東大に提出、一九二九年法学博士の学位を得た。それが翌年著書として刊行された。芦田とトルコの結びつきについては、松谷浩尚『イスタンブールを愛した人々』エピソードで綴る激動のトルコ（一九九八年、中公新書）第七章
- (8) 外務省外交史料館史料（以下外交史料と略す）
- (9) 在英林公使より小村外相宛電報一九〇四年一月二日（外交史料）
- (10) 在オデッサ飯島亀太郎領事より小村外相宛電報一九〇四年三月一〇日（外交史料）
- (11) 牧野伸顕『回顧録』（上）（一九七七年、中公文庫）二七一―二七二頁
- (12) 在オーストリー牧野公使より小村外相宛電報一九〇四年一月八日（外交史料）
なお義勇艦隊の両海峡通過については、稲葉千晴「日露戦争中のトルコ海峡問題―ロシア義勇艦隊通過をめぐる日露の争い」（名城大学『都市情報学研究』四号、一九九九年）が詳しい。
- (13) 山田寅次郎については、本人の書いた『土耳其古画観』（一九二一年、博文館）のほか伝記に山樵亭主人『新月山田寅次郎』（一九五二年、非売品）、小林不二男『日本イスラーム史』（一九八八年、日本イスラーム友好連盟）の第一章、松谷浩尚前掲『イスタンブールを愛した人々』第四章、研究論文に長場紘「山田寅次郎の軌跡―日本・トルコ関係史の一側面」（『上智アジア学』一四号、一九九六年）、セルチュク・エセンベル「世紀末イスタンブールの日本人―山田寅次郎の生涯と『土耳其古画観』」（前掲池井、坂本編書所収）
- (14) 山田のイスタンブールにあつての民間大使の役割を松谷氏は四つに分類している。①日本の外交活動を補佐したこと、具体的には日本・トルコ条約締結をめぐる外交交渉への協力、②日本から来訪する要人に便宜供与をおこなつたこと、③日本事情の紹介、茶道を利用しての文化交流に尽力したこと、④国際結婚した日本人やイスタンブールで無銭となつた日本人グループを援護するなどいわゆる領事事務を自発的におこなつたこと（前掲松谷『イスタンブールを愛した人々』七五―八二頁）
- (15) 鹿島守之助『日本外交史七卷・日露戦争』（一九七〇年、鹿島出版会）二二二頁
- (16) 芦田前掲書二二二―二三三頁
- (17) 山田前掲書二二頁

- (18) 日露戦争に対し送られた外国の観戦武官については、安岡昭男「日露戦争と外国観戦武官」(『政治経済史学』四三八・四三九合併号、二〇〇三年)
- (19) 内藤智秀「日露戦争とパン・イスラミズム」(『国際政治』三六号、一九六七年) 九〇―九二頁
- (20) 同右論文九二頁、日露戦争当時のニュース映画については田中純一郎「日本映画発達史」(I)(一九八〇年、中央公論社)一一四―一一五頁
- (21) 山田前掲書一一頁
- (22) 内藤前掲論文九二頁、なお彼は心から親日家となり、息子イブラヒム・ベイを早稲田大学に四年間留学させたという。
- (23) 内藤前掲書三三四頁
- (24) ウムット・アルク前掲書五〇頁
- (25) 同右書五一頁、なお元駐トルコ大使山口洋一氏によると現在首都アンカラのアタチュルク大通りにある最高級の靴店の屋号はTOGOであるという(同氏「トルコが見えてくる―この親日国の重要性」一九九五年、サイマル出版会、一一頁)
- (26) ウムット・アルク前掲書五二頁
- (27) 牧野前掲書二八六―二九八頁
- (28) 松谷前掲書『イスタンブールを愛した人々』九一―九二頁
- (29) ローザンヌ条約もすんなり調印されたわけではない。この間の事情を当時の日本代表林権助はつぎのように語っている。「欧州での国際会議は、大抵日本にはさして直接の利害が少なかったので、高見の見物といふ場合が多かつたが、唯一つローザンヌ会議のとき、トルコの問題について実に困つた事があつた。それはトルコが、列国の治外法権を撤去せられたいと、つよく主張したのである。欧州列強の代表者は、トルコの問題は時期尚早だとして、これを拒否せんとしてゐる。そして、わたしにもその主張を支持して呉れと言ふ。これには列強に対する前後の關係上、嫌と云ふ訳には行かぬ。さりとて、それを支持してトルコの要求の拒否に加担したとすれば、トルコとの国交上更に実に気まづい關係に陥らざるを得ない。なるほど日本は欧州大戦当時には、トルコを敵の片割れと取り扱はねばなら

なかつたが、日本の国勢進展上実には条約を取り交はし大使館も開いていろいろ兩國間の親交を謀らざるを得ない機運に際会してゐる。そしてその準備に色々研究を重ねてゐるときである。今にも、日本としてはトルコと条約を結ぶといふ事が既定のプランとなつてゐた。かういふ場合に列国側に賛成すれば列国はそのまま治外法権を維持し、日本は初めて条約を結ぶのであるから必ずトルコのために日土条約にはこの法権を除いてやらねばならぬ。この場合日本が列強の意志と正面に反対した条約を結ぶといふ事に立ち至り、列強との間に一抹の紛争と反日を招致することになるであらう。わたしは実際弱つたよ。それで一方では列強の立場に賛同する様な態度を見せておきつつも、他方では内密にトルコに対しては「貴国の方としては結局列国の拒否を蹴飛ばしてしまへ」といふ示唆をなさざるを得なかつた。トルコも之に大いに底意を強くしたらしく、たうとう頑張りとはしてその主張が通ることになつた。トルコも喜んで、わたしもほつと息をついたよ」(林権助述『わが七十年を語る』、一九三五年、第一書房、三六三―三六四頁)

本稿は「日露戦争とトルコ」(『歴史読本』二〇〇四年四月号)を大幅に加筆、訂正したものである。

(追記) 本稿が印刷に付されてから、稲葉千晴「1904年、トルコ海峡をめぐる日露の謀報戦―日露戦争秘話(上)」(『世界週報』二〇〇四年三月九日号)に接した。稲葉氏はイスタンブールを訪れた時、ガラタ塔に登り、ボスポラス海峡を一望した。海峡は全長三〇キロメートル、幅〇・六から三キロと比較的狭い。別に塔に身を隠して遠望しなくても海峡はどこからでも眼下に広がっている。少なくとも海峡監視のためガラタ塔に二〇人を配置する必要など全く感じられないという。したがって本論文の九頁九行目の記述は訂正の必要がある。